

2009年
7月3日
金曜日

I

今朝のお話は「百年に一度の危機」という、今でも度々用いられる言葉の意味合いを、私が専攻する経済史論という経済学の一領域から考えてみたいと思います。

ひとは未経験の大きな社会現象に遭遇すると「百年に一度」と語り、また「新〇〇現象」とか「〇〇革命」の表現で、新事態を捉えようとしません。歴史上、度々「ニュー・エコノミー」と名付けられた各現象は、過去百年間に4回出現したとされます。最新のそれは、一九九〇年代半ばにIT革命により情報管理をつうじ需要・供給状況が事前に調整されて、景気循環が消滅していく新経済システムの到来を謳っていました。この「ニュー・エコノミー」論も同現象も（景気循環は存続する故に）

市川文彦 准教授（経済史学）

「百年に一度の危機」は、百年ごとか？

「新現象」の反復的到來

*聖句…「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

実に短命に消え去りました。これに先行した三次に亘る「ニュー・エコノミー」の中身は各時代を反映して異なりませんが、「新現象ニュー・エコノミー」自体が姿を変え繰返し登場し、主張されるのは真に興味深いものです。

II

確かに「大恐慌」「大不況」と呼ぶべき経済システムの基盤を揺るがす大変動は、めったに出現するものではありません。しかし景気循環で好況・不況が反復的に繰返されるように、時に経済危機と呼びうる大現象の再発も、人間の一生で何度かあり得ます。

その意味で、これからも「百年に一度！」と感ずるような革命的現象や大型の不況や好景気は、今後何十年かおきに生じることでしょう。残

念ながら「百年に一度」と称されようとも、「百年ごと」よりも、より短い周期で、より頻度も高く。しかも、これら「未想定訪問者」の如き新現象は、性質も形成要因も、背景となる経済環境が絶えず変化し続けるため、その現象が生じる度に、毎回、毎回異なるタイプの事態となっていくことでしょう。

かつて一九二九年秋（暗黒の木曜日）に発生した大恐慌を、自ら子供時代に体験した理論経済学者たちへ、大恐慌の個人的記憶と、大恐慌を如何に経済学で捉えていくかを問うた貴重なインタビュー録があります。それによれば、多くの経済学者たちは「一九二九年大恐慌の、現代への再来はない」とするものの、代わりに「しかし深刻な経済危機は今後も生じうる」と指摘（M・アブラモビッツなど。R・E・パーカー

『大恐慌を見た経済学者11人はどう生きたか』、二〇〇五年）。新たな不況が性格を変え、何度も到来すると想定しながら。

III

このお話の冒頭で舟木 讓先生に読んで頂いた今朝の聖句「コリント人への手紙 二」4・18（*）が示すように、目に入る現象ばかりに囚われず、諸現象の裏側にある、目に見えぬ複雑な背景や、先入観を超えて存在する新たな諸要素にも想像力を以て十分注意を払い、事物の「新しさ」と「反復」とを判別していく姿勢こそ、神様が我々人間にここで与えた教えであるように思えます。皆さんは、この教えと「百年に一度！」を、如何に体感していますか？